

第2回旧広島陸軍被服支廠の活用の方向性に係る懇談会 議事録

日時 令和4年1月26日(水) 10時00分～

場所 朝日生命広島胡町ビル第1研修室

(WEB会議)

1 開会

事務局より開会挨拶, 委員紹介

2 議題

(1) 被服支廠に関する情報の共有

① 広島歴史と被服支廠について

広島市郷土資料館 主任学芸員 前野 やよい

② 被服支廠の価値について

アーキワーク広島代表 高田 真

③ 大規模構造物の活用(事例)について

近畿大学 社会環境工学科 教授 岡田 昌彰

(2) 意見交換

① 被服支廠の歴史や価値を踏まえた活用を進めるためのポイント

A委員

今の広島の様々な人々の被服支廠に対する思いを聞き取ることも必要ではないかと考えている。合わせて、持続可能性が大事と感じている。

宇品港と被服支廠を一体で考えることが重要ということがよく理解できた。

被服支廠は、糧秣支廠と異なり水辺に立地していない。戦前期は特に物流には水運が大事だったが、被服支廠は水辺でなく鉄道と接続したことについて、広島市街地の広がり方と絡めて背景などあれば伺いたい。

B委員

糧秣支廠については、宇品地区の有力者が土地を提供したことで立地した。穀物等を搬出入するのに河口の立地はとても適していたと思う。被服支廠が水辺に立地しなかった理由は、個人的には広大な場所が必要だったことや、鉄道がすでにあったことが大きいのではないと思う。

A委員

語り継いでいくということとともに、創り出すということが重要。旧生糸生産工場を活用したデザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)のように価値を生み出すといったことの(市民との)接点が大事だと思っている。しかし、外から来た人からすると駅から遠く、水辺からのアクセスも厳しいので、歩いて繋ぐということができればよいと思う。現在の市街地よりも海辺が中心であったということ言えば、広島市の新しい使い方も提案できる。

- C委員 被服支廠は福利厚生が整っていたということで、企業城下町のような町を形成しているという部分もあったと思う。お金や人の動きが活発で、地域文化が豊かであったということか。
- B委員 被服支廠だけでなく「三廠」ともに、保育園など福利厚生は充実していた。また、創立記念の時は仮装大会などのイベントもされていた。従業員も誇りある職場で一生懸命働いて、各支廠の発展に尽くすという意識があったものと思う。
- C委員 呉の軍用水道と同様、広島でも宇品への第5師団の立地によりインフラ整備が急速に進んだという経緯があるか。
- B委員 日清戦争時点では広島には上水道が完備されておらず、軍は苦勞したと聞いている。それを受けて軍用水道ができ、それを市民が使用する水道にも接続したことで、比較的早期に上水道が整備されたと言われている。
- D委員 被服支廠は軍事施設としての印象が強かったが、従業員が愛着を持って働いていた職場であり、近隣への影響力の強い施設であったことを改めて感じた。現在、出汐の街ではそんな面影がないが、近隣にそういった愛着のよりどころとなるようなものは残っているか教えてほしい。
- B委員 直接周辺の方とお話する機会はないが、被服支廠に勤めていた方の遺族の方からは、誇りを持って働いていたということは聞いた。
- E委員 被爆時に周囲に人家があったのかが気になっている。西側の市街地には被爆したものもいくつか残っており、直近は戦前期に区画整理されたと記憶しているが、どのような状況だったのか。
- B委員 具体的には調査はしておらず、数は把握していない。ただ、被爆前から被服支廠の裏に住んでいた、という話は聞いており、ある程度の人家はあったものと想定できる。現在はショッピングモールになっている専売公社工場跡の近くの電停から、被服支廠に通勤する経路として1.5キロほどの道路が残っている。現在は店舗も少なくなっているが、皆実町中通り商店街（通称「被服廠通り」）という。
- C委員 この機会に発掘できることがあるとよい。学生にも卒業研究などでやっていただけたら。
- F委員 価値の表明をする上では問題ないが、活用となった場合、軍都広島としての側面も踏まえる必要がある。

- E 委員 広島の本廠は外地に部隊を送っていく拠点であった。
地域の方の声については、地元の方々に自主的に聞き取りをしているグループがあるため、必要に応じて情報提供する。
遺構については、前面道路の半分程度はかつて掘割だったと聞いており、護岸の先端と考えられるものが残っている。また、現在被服支廠の跡地は広島県立工業高校・広島県立皆実高校となっているため、スケール感としては良く残っていると言えるのではないか。宇品線は南宇品の一部以外、直線的に確認できる廃線敷はないが、モニュメント等は残っている。
- A 委員 被服支廠は女性が多く働いていた場所という部分が、ありのままの、日常の歴史を語り継ぐ上で重要。
現在の被服支廠と地域との関係はどうか。
- E 委員 最近になって壊すか、残すかという話になった時に、地元でも話題になり様々な反応があったが、積極的に壊したい、残したいという声は少ない。ただ、中にはカメラを持って歩くことに対して快く思わない方もおられるのではないかと。
- A 委員 活用を語る上ではまず知ることが重要で、それを踏まえて様々なことを考え、未来に語り継ぐことが重要。活用の視点から、SDGs、歴史、働き方、環境などのことを知り、それを未来に伝えるための教育という視点も重要である。
- G 委員 被服支廠がなぜ被爆時に避難場所として使用できたのか、ということは疑問に思っていたが、多くの機能が避難していたということで納得した。
近代遺産として被服支廠をとらえたときに、軍都広島ということ踏まえつつ、アピールができると良い。また、広島には当時多くの外地の方が来ており、被爆されたという事実もある中で、それを把握しているという位置づけがされていることが、広島を多様性を尊重する街として示していくことにもつながる。
また、利活用を考える際には、地元の方が愛着をもてること、運営費をしっかり稼いでいくことなど、持続可能性が重要だという意見に共感した。それをどう作り上げていくかはワークショップで議論を深めていければよい。
- H 委員 市民も多くは被服支廠についてまだ良く知らず、残すも残さないも判断できる情報を有していないというのが現状ではないかと。また、被爆以前のことあまり多く触れられておらず、軍都としての過去なども含めて、被爆以前も含める形で「ヒロシマ」の概念を拡張していくことも被服支廠をとらえていく中で必要。
実際に活用された後で、多くの方々がいかに愛着を感じ、誇りを持つかが大事ということに大きく共感した。最初から市民と一緒に考え、育てていくという考え方が大事だと

思う。人と一緒に成長していく場になることが愛着やシビックプライドにつながる。検討期間を含め早い段階でそのようにしていけると良い。

I 委員 現代アートによる活用には、そのための経済が回っていないとなかなか難しい現状はあるが、アートや教育に企業理念を持ってきていいのかという問題もある。アートはもっと自由である。また、アートは歴史、政治、社会の問題をしっかりと理解して表現をする必要がある。広島の立地を考えると、西洋だけでなくアジアのアートもいるのではと思う。

宇品線の近くに住んでいたことがある。宇品線では朝鮮戦争でも物資が多く輸送されており、被爆前の被服支廠の役割と似ている。そのような役割があったことは平和学習の点で抜けている視点ではないかと思う。いろいろな立場や考え方があるということ踏まえて進めるべきである。

C 委員 戦争の歴史は終戦で終わらなかったということは、被服支廠の歴史をどう扱うかという点で大事な指摘であった。

F 委員 最後に本懇談会がどのような提言をするかという「出口」の骨格の話も議論しておくべき。その中で課題を確認した上で再度様々な情報を見ていく、という作業をしていく必要がある。

C 委員 皆様から頂いた観点は今後の検討を進めるポイントや基本方針として整理していく。次回の議論の中で提示していただければと思う。

② 第3回懇談会の議題（案）について

【事務局】説明

③その他

【事務局】第1回ワークショップの説明

以上